

【38】 関門トンネルの“土砂没”

昭和 28 年（1953）6 月末の九州を襲った梅雨前線豪雨では、南は熊本県の白川から北の筑後川、遠賀川さらに今の北九州市まで広範囲にわたる大水害となり、死者千人以上、浸水戸数 60 万戸以上という甚大な被害を出しました。

このとき、北九州の門司では、前面に関門海峡を控えた市街地の背後に迫る山地の崩壊が激しく、外水とも内水とも言い難い土砂まじりの洪水が発生し、市街地や鉄道線路を浸水させました。洪水は、国鉄門司駅の北方に口を開けている関門トンネルにも流れ込み、戦争中の昭和 17 年（1942）に単線が開通し、その 2 年後に複線として完成したばかりの海底トンネルは 10 年目にして完全に水没してしまったのです。

当然ですが、海底トンネルは中央部が低くなっていますので侵入した氾濫水の逃げ場がなく、また、水に含まれあるいは押し流されてきた大量の土砂が、トンネル内に沈殿してしまいました。

復旧作業は単なるポンプによる排水だけでなく、トンネル内に堆積した土砂を除却するのに手間がかかり、大勢の作業員を入れ人海戦術の掘削と貨車による搬出作業による半月近く of 労苦の末、ようやく開通にこぎつけました。この間、国道の海底トンネルはまだ工事中でしたので本州と九州の陸路は完全に途絶えたのです。この災害に懲りて国鉄は関門トンネルの入り口に防水扉を設けました。